

## ことばを学ぶための学び ～单元学習「友達を紹介しよう」～

藤原一恵

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: fujiwara\_kz@fuzoku.tottori-u.ac.jp

**Kazue FUJIWARA (Tottori University Junior High School) : Learning to learn words — Words and phrases to introduce people**

**要旨** — 『ことばを学ぶこと』とはどんなことなのかを実感するために、「ことばの多様性」を楽しみながら、共に学ぶ仲間づくりのできる单元学習を設定した。実践の成果として、学習者の関係が深まり活発に学習できたことで、多様な表現を楽しむ環境が整った。

**キーワード** — ことばを学ぶ, ことばの多様性, 人物紹介

**Abstract** — A unit learning that enables building of a circle of friends who learn together, enjoying “diversity of words”, was settled, to make students realize what is “learning words”. As a result of the practice of the unit learning, students were able to learn actively and intimately one another and an environment where students can enjoy various expressions of words was consolidated.

**Key words** — word learning, Variety of the expression, introducing people

### 1. はじめに

#### 1.1. 国語学習の課題

現在、人工知能（AI）はめまぐるしい進化を遂げ私たちの生活の中に進出してきている。子どもたちが社会へ出ていく頃には、今ある職業の多くがそれらの機器に取って代われ、必要とされなくなると予想されている。そんな時代を生きていくには、「人にしかない力」を備えておく必要がある。それは、相手の気持ちを理解してコミュニケーションをとる力や、新しいものを創り出す力、「ソウゾウする力」だと考える。そして、言葉を通して実現することができる力である。その力を培うための基礎となる国語の学習は、大きな責任を担っていると考える。

だからこそ、国語の学習はこれからの時代を生きていくために不可欠である。それぞれが、自分が思い描く幸せな人生を送るためには、自分の頭で考える力と、言葉を正確に受けとり発信する力を十分備えて社会に出て行く必要があるからである。

また、都市化、国際化が進む現在では、見知らぬ人や外国人との意思疎通、少子高齢化により異なる世代との意思疎通、日々進化して

いく情報機器を介しての間接的な意思疎通などにおいて、多用で円滑なコミュニケーションを実現するためには、これまで以上の国語力が求められるといわれている。

#### 1.2 生徒の実態と課題

今年度担当したのは1年生である。この生徒達にも、これからの時代を担って生きていくには、今まで以上のコミュニケーション力を求められている。国語の授業においてその力をつけるための言語活動を、より多く取り入れていく必要があるのは明らかである。

しかし、小説文・説明文・漢字の成り立ち・文法（文節）の学習を行う中で、言語活動を取り入れた学習が難しいと感じる場面が多くあった。例えば、毎時間行っている漢字小テストで「大記録をジュリツする」と出題をするが、樹木の「樹」と起立の「立」で「樹立」だと分からない。また、「ヒガンの墓参り」などの「ことば」を知らないため「～って、何ですか？」という質問が多い。

さらに、段落内容をまとめたり、人物の特徴を文章から探してまとめたりする読み取り活動では、発問に対する答えに当たる本文には適切に

傍線を引いているが、ワークシートに自分なりに書いてみるということをしないで、板書をワークシートに書き取ることを繰り返す生徒がいることも気がかりであった。

「ことば」には多様な捉え方や広がりがあることを実感し、ことば自体を楽しめる環境づくりをする必要があると感じた。そのためには「自由に考えたことを話せる関係」ができていなければならない。

また、近年「話し方」「書き方」といった技能習得が目的となった学習が中心となり、本質的に「ことば」とは何か、どんな役目があるのか、どんな性格かといった学習を私自身も見過ごしてきた。だからこそ、「ことば」についての学習をする必要があると感じ、答えが一つではない学習や、多様な表現を楽しめる学習を取り入れたいと考えた。そして、国語学習の場が「ソウゾウ～想像・創造～する」楽しさを味わう場にしていきたいと考えた。

## 2 授業実践

### 2.1 学習過程

学習計画（全 10 時間）

第 1 次 「人を紹介する」言葉とは

- (1) 「ほめる言葉」にはどんなものがあるか
- (2) 「かっこいい」を他の言葉で表そう
- (3) 「おもしろい」をよい意味で伝わるような他の言葉で表そう

第 2 次 友達を紹介する作文を書く

- (1) 紹介する友達の情報を集め、その人が一番輝くポイントを見つけよう
- (2) より詳しく聞き取ろう
- (3) 作文の構成を考えよう
- (4) 作文を書く

第 3 次 文集にまとめよう

- (1) 互いの作文を読み合ってコメントしよう
- (2) 推敲・清書

### 2.2 学習のねらい

多様な表現を楽しむことで「答えが一つではなくてよいのだ」と実感し、学習に向かう構えを変える。そして「ことば」の多様性に気づき表現を工夫することで、自分の言葉が人を喜ばせることを実感する。

さらに互いを認め合うことで、より親しく関わられる関係が築け、今後より活発に言語活動に取り組み、学習を深められることを期待する。

### 2.3 「ねらい」を達成するための工夫

#### 2.3.1 「うまく書かなければ」と思わせる題材を設定

誰もがほめられると嬉しいものだ。その思いがわかるからこそ、紹介される相手が満足し、周りの友達に自分の紹介した友達のことを「すごい」「カッコイイ」と思ってもらいたいという気持ちが生じる。するとよい作文を書きたいという意欲が自然とわいてくる。

より良い表現を求めさせるには、学習者にその目的を持たせることが必要である。今回は相手を強く意識させるテーマを仕掛け、「書く」目的をはっきりと持たせたことで、学習の初めから積極的に学習に取り組むことができた。

#### 2.3.2 話せる関係作り～ 3 人グループ～

学習活動に全員が参加しやすい 3 人グループを編成し、年間通して言語活動に取り組むことにしている。グループを変えることで多様な考えや表現に触れることができるのも考えるのだが、ここでは岡本（1985）が子どもの言語発達の段階として提起した「1 次的事ことば」でも「2 次的事ことば」でもない場での会話、小笠原（2016）の「1.5 次的事ことば」会話ができることを優先した。年間を通して同じ仲間と会話することでより心を開いて自由な発想自由な表現が出せることをねらっている。

実際に生徒たちはグループ学習の時間を楽しみにしており、どの学習においても非常に協力的に取り組むことができています。

#### 2.3.3 魅力を聞き出す方法

互いのことを知らない間柄で、様々な観点から質問をし、その友達が輝いて見えることを会話の中から探っていくことが難しかったようだ。相手がどんなことを幸せだとか楽しいと感じ、何を目標として中学校生活を送っているのかを「趣味は？」「特技は？」「部活は？」といったありきたりの質問から、「なぜそれを始めたの？」「どう

して続けているの？」「一番楽しかったときは？」といった風に、「なぜ」「どうして」を繰り返して、より具体的に相手のエピソードを引き出していくことを勧めた。すると、生き活きと質問に答え、聞かれていなくてもその時の思い出話をする姿も見られた。そうすると、書き手は相手が輝いて見えるポイントを見つけることができる。生徒たちは友達の輝きを見つけようと「なぜ」「どうして」を繰り返して楽しそうに聞き取りをしていた。

話ながら相手のことを知ることができ、相手に自分を知ってもらうことができ、グループの雰囲気や和やかになっていくように感じられた。

また、人物を魅力的に紹介する文章はどのような書き方がされているのかについて、教科書教材「ものづくりに生きる」(学校図書)の書き方を参考にした。また、「朝日中学生新聞 interview」や「プロフェッショナルー仕事の流儀ー」の書き出しや見出しのことも参考にさせた。

原稿用紙に向かっていざ書き始めると、無言で各々の作文に集中して書いていた。十分な聞き取りにより、書きたいことがしっかりと準備できていたことが分かる。作文の時間は2時間だったが、あっという間に原稿用紙3枚を書き上げることができた。

### 2.3.4 コメントをもらう

書いた作文は文集にするため、書いたものを互いに読み合い、多くの人の目に触れるのにふさわしい作文であるかを判断してもらう必要が生じる。あわせて、作文としてはよい文章であっても事実と相違があってはならないので、紹介する相手が確認をした。

読むときには「誰が読んでもよい作文に」なるよう、細かな表現にまで注意を払って読んでいた。自分の作文ではないが、一生懸命に話をし、書いていた姿を互いに知っているからこそ、心を込めて作文が読めたのだと思う。そして、読後に「〇〇という表現が上手だった」「△さんの意外な□□というところが詳しく書かれていてよかった」とどこがどのようによかったのかをコメントした。自分のことが書かれた作文を照れくさそうに、うれしそうに読んでいる生徒がたくさんいた。書き手としては何よりもうれしい評価だっただろう。

逆に「オレこんなことできてない。」「こんなにすごい。」と謙遜したり、事実を誇張しすぎた表現を指摘したりするコメントもあった。

コメントをもとに、清書をした。清書の際も熱心に推敲を行う姿に、「より良い作文にしたい」という思いが強く伝わってきた。

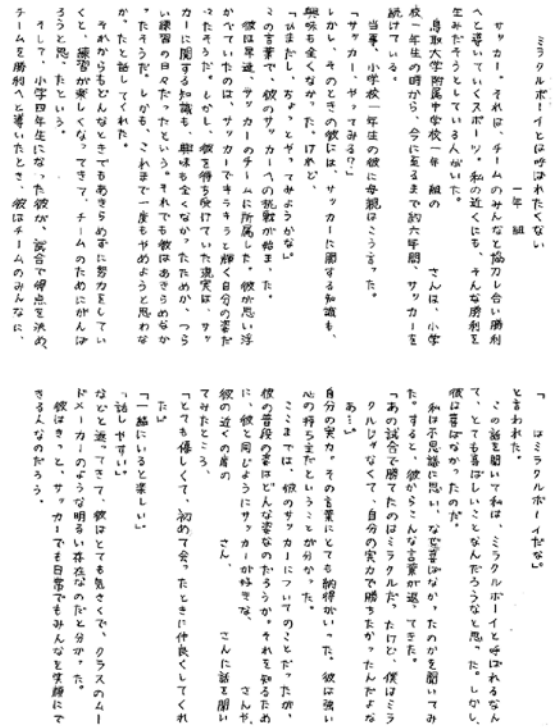


図 1.1 生徒作文。

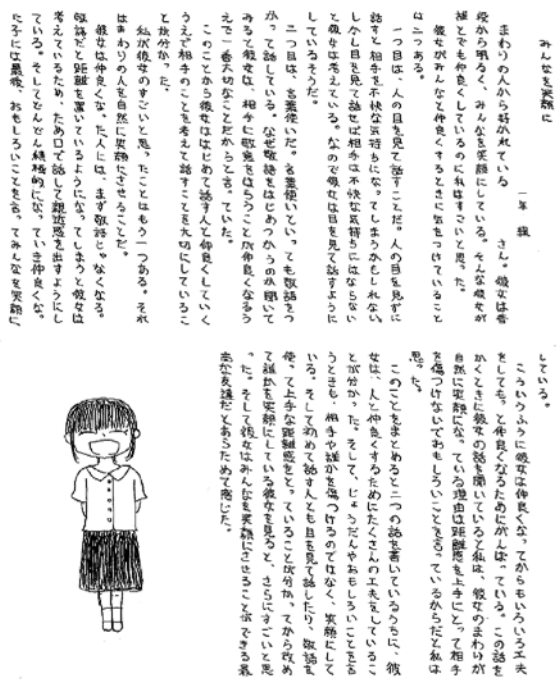


図 1.2 生徒作文。

### 3 成果と課題

#### 3.1 ことばの多様性に気づく

「カッコイイ」というほめ言葉を他のことばに言い換えようという学習では、各学級で60以上のことばが上がった。一つの事柄に対して、それを表現することばが多様にあることに気づき、黒板一面に書かれたことばを見て生徒たちは満足げであり、ことばの楽しむことの入り口に立てた。

その後の学習では、自分の考えだけでなく友達表現を必ずメモする習慣が身についてきている。「同じものでも表し方が違うこと」に気づき、よりたくさん表現に触れることが大切であると気付いているように感じる。

#### 3.2 互いを認め合う関係づくり

毎日一緒に過ごしているクラスメイトでも知らないことは多い。3人のグループで互いを紹介し合うことで、「どんな人物か」を知ることができた。また、作文を書くための聞き取りをすることを通して、自然に会話できる関係ができてきた。

「今日はグループで学習します。」と言うと、「やった！」と言って席を移動する生徒が多く、どのような学習テーマであっても積極的に意見を出して課題に向かう姿勢が整っている。

分からないことでも遠慮なく質問をし、一緒に考える姿や互いのワークシートを見せ合いながら

意見を交換する姿を見ると、「互いの表現を楽しめる環境づくり」は成功であったと実感している。

#### 3.3 今後の課題

多様に表現することの楽しさや、友達と協力して学ぶことの楽しさを実感して学習に取り組む姿勢は育ったが、より良い表現を求める姿勢は身につけていない。今はことばの広がりを楽しむことに特化してしまっている。今後はグループ間の交流や、多くの作品に触れることを通して「ことばを吟味する」ことに挑戦していきたい。そして、場に応じた適切な表現をする力を備え、どの場面でも正しいコミュニケーションができることばの力を備えていきたいと考える。そのためには、やはり生徒に「書きたい、話したい、聞きたい」と思わせるテーマを仕掛けていく必要がある。生徒の実態や世間の情報に目を向け、日々学習のテーマを探っていくことがこれからの大きな課題となる。

#### 参考文献

- 遠藤瑛子（1992）ことばと心を育てる－総合単元学習－溪水社 109-122 pp  
小笠原拓（2016）月刊国語教育研究「1.5 次のことば」を育てる－全ての学びの基盤として－日本国語教育学会 4-7 pp